

各課報告

図書館庶務課

図書館庶務課業務は、図書館資料の選書、発注、受入、支払い、除籍、調査・統計業務、各種契約業務、予算管理、図書館広報、各種委員会事務局業務、図書館システムの運営・開発等に加え、図書館事務部業務内の他課に属さない事柄である。いわゆる図書館におけるテクニカルサービスに属する業務を担っている。課内各係は、庶務(経理を含む)係、発注・受入係、システム係に分かれている。

図書館庶務課の役割はこうに多岐にわたるが、図書館全体のレベルアップ、とりわけ効率の良い業務の展開や利用者サービスの向上のために環境整備をすることが最大の役割であると認識している。

2001年度特筆すべきイベントは、8月に行った私立大学図書館協会総会・研究大会の会場校としての取組みであった。大会当日は図書館事務部全体で取り組んだが、数ヶ月前から事務局として準備を進め対応してきた。幸い参加者の多くの方々からお褒めをいただき成功裡に閉幕することができたが、図書館庶務課にとっても、図書館全体としても大きな自信と誇りを得ることができたと思っている。

発注・受入業務は、前年度に引き続き「書店連携システム」をスムーズに運用している。また、特別資料選定委員会、学習用基礎資料選定委員会、中央図書館学習用図書選書委員会等の事務局業務を担い運営を円滑に行っている。業務改善の一方策として、受入係と整理業務を一体化するための検討を継続した。その結果2002年度から受入係(専任職員、嘱託職員各2名)業務を整理課に移管することとした。

図書館システム関係業務としては、日常的に発生するシステム改善要望やトラブルに対する対応、新規開発業務の対応がある。加えて電子図書館機能開発への対応、図書自動貸出機のシステム対応、マルチメディアコーナーのサポート等に忙殺された。

課内業務全体から見ると、本年度は既述の私立大学図書館協会の総会・研究大会会場校としての業務があり、各種事務局業務など疎かになった点があるのは否めない。きめの細かな業務の点検など、今後対応しなければならない業務は山積している。

整理課

2000年10月よりはじめた、和書・開架資料の発注・受入・整理・装備を一括して業務委託する書店連携システムは、2001年10月からはその対象資料を開架図書にも拡大したため、年度受入の和書一般資料の多くを業務委託することとなった。従来の開架資料に限定されている場合と、業務内容にそれほど相違は無いため、研究用図書、参考図書等請求記号の付与に神経を払う業務が増えたとはいえ、順調に移行することができたと言える。これは、3館の背ラベルが、開架(赤)・閉架(黒)の2種類で統一されたため、業務の効率性が維持されたことが大きいと判断される。また、毎月第3水曜日に各課担当者と受託業者で定例会を開催し、様々な問題を検討してきたが、1年半で課題が一掃された。図書館のシステム担当者をはじめ双方の担当者の労をねぎらいたい。

一方、洋書についても業務委託をすることで様々な角度から検討を重ね、計画を進めていた。しかし、研究用図書が大部分を占めるため、発注部分がネックとなり、和書のようなシステムを構築しても効率が上がらないことから、単純に整理・装備業務を委託するにとどまった。また、業務委託費が当初の計画から大幅に削減されたことなどから、2001年度は英語資料のみを委託するにとどまった。人事異動で人員が削減となったのに対して、計画が縮小されたため、洋書担当課員に大きな負担を負わせることとなった。

2002年度からは、和・洋とも受入業務を図書館庶務課から、また新規受入図書の装備業務を閲覧部署から移管することが決定している。これによって、受入・検収業務と整理業務との合理的結合が可能となろう。

未遡及・未整理図書のデータ化では、旧分類（ABC分類）のうち和書については明大文庫、逐次刊行物を除いて全て遡及が終わり、洋書も一部分遡及することができた。次年度で洋書の遡及が終わる予定となっている。まお、明大文庫、逐次刊行物については内部処理する予定である。佐藤正彰氏寄贈資料のデータ整備も終了し、年度末には冊子体目録を発行することができた。江戸文藝文庫についても、10月にその整理を完了した。

授業支援としては、司書課程・阪田教授の「図書館学総論」において、図書館所蔵の西洋古版本の展観、解題を洋書担当者が行い、受講生から好評を博した。

1999年に行われた、図書館新システムへのデータ移行時に損なわれた目録データの修復業務および遡及データチェック業務については、図書館庶務課システム担当者と打合せを重ねるとともに、とりあえず整理課でできる範囲のデータ修正を開始した。計画当初よりも遅れているので、これからのスピードアップが課題となる。

明大文庫分類コード改定案、貴重書分類改定案は総合サービス課と検討を重ね、大筋の合意を得るまでになっている。2002年度中の改定が見込まれている。

最後に、永年図書館の事務室内で無言の存在感をアピールしていた和書名目録カードを、8月に廃棄した。この目録を維持するため、何百人の人たちの労苦が積み重ねられていたかと思うと複雑な心境である。

総合サービス課

2001年3月16日に新図書館が開館し、4月1日に総合サービス課が閲覧課と文献情報課を統合し誕生した。

新図書館は利用者に大変に好評で、入館者は昨年比66%増の85万人となった。とりわけ新たに開設したマルチメディアエリアは、インターネットに接続可能なパソコンを50台設置し、常時待ち行列ができるほどの盛況である。新図書館の施設やサービス内容を知らしめるために各種パンフレットを用意し、ゼミツアー、フリーツアー、OPAC検索、文献検索など各種利用案内を実施した。さらに学外からの見学者が大幅に増加し、職員総出でガイダンスを行った。特に私立大学図書館協会総会・研究大会（明治大学は会場校）はパネルセッション形式での案内を行い、私立大学図書館関係者への新図書館お披露目の機会となった。また山手コンソーシアム8大学の2001年度の総利用者数は10593名であり、そのうち本学には半数以上の5627名が利用した。これも新図書館効

果であろう。

旧図書館と比較してサービスエリアが拡大したことによる課題も多く出現した。職場研修では、新図書館のかかえる問題点や利用者の増加による利用サービスのあり方について検討した。特に原田学生相談室事務長の講義はカウンター業務での危機管理についてであり、全課員が危機管理についての共通認識を持つことができた。

施設面では様々な苦情が寄せられた。とりわけ電卓使用者については、使用者、非使用者からのものが多く、そのためにB1アンバウンド雑誌コーナー脇、B3共同閲覧室入り口付近の閲覧席を専用席とし、多目的ホールについても平日は開放することとした。

新図書館は入館ゲートを設け、身分証による認証を行っているが、校友や館長許可による特別利用者などは、ライブラリーカードを発行することで入館や自動貸出機対応が可能となった。

1. 新中央図書館の開館に伴い新たに展開した主なサービスは、以下のとおりである。

(1) 日曜・祝日開館（10：00－17：00）の実施

(2) 日曜・祝日は業務委託により42日間開館し、年間開館日が大幅に延長

2. 開館時間の延長

平日の開館時間を22時まで延長した。

3. 学生パートによる書架整備業務を実施

4. ギャラリーで「芦田文庫古地図展」、「花の都江戸の賑わい展」を開催。

なお、学外においても全国校友金沢大会の記念行事に石川県立図書館と共催による展覧会を開催し、芦田文庫所蔵資料「輿地図編小解」などを出展し、職員による解説を行った。

5. ブックリターンポストの常設

貸出・返却のカウンターが地下2階にあるため利用者の便を考慮して1階にブックリターンポストを常設し、地下2階にまで足を運ぶことなく返却ができるようになった。

また、駿河台B地区建設計画に伴い5号館が取り壊され、図書館自習室が11号館33番教室に移転し、9月30日に共通自習室と名称を変更して運用をはじめた。図書館自習室より規模が縮小したことで利用者からの投書が多く、今後は大学の施設として共通自習室をどのように運営していくのか、議論すべき課題であろう。

その他に各学部資料センターの移転に伴い、法学部資料センターに別置していた図書を自動書庫に配架した。商学部資料センターから移管した雑誌は、B2に仮置（未整理）し、今後は目録及び装備作業をすすめることになる。

和泉図書館

和泉図書館は、「利用しやすい図書館」を目指し、資料の充実、施設の改善、資料配架の工夫等を行っている。2001年度は雑誌・新聞閲覧コーナーの見直しを行い、改善を図った。また、学内のIT化が進む中で、館内施設を転用し、新たにパソコンルームを設け、学内LANの情報コンセントを配備した。図書館で収集・契約しているCD-ROM、

電子ジャーナル、データベース等の電子メディアを利用する端末機の設置を行い、利用者の便益を図った。今年度も、図書をより身近に感じてもらうための講演会「著者と語る」を開催した。

1. 資料の配置とサインの見直し

(1) 第2開架閲覧室内に配架していた新聞(バックナンバー、2ヶ月分)を雑誌・新聞閲覧コーナーに移設した。また、新聞閲覧コーナーの閲覧机・ソファの配置替えを行い、より使いやすくした。

(2) 閲覧室内のサインを極力少なくし、雰囲気をはげしくするようにした。

2. 和泉地区情報環境整備の一環として、ネットワーク工事及び電源工事が行われ、新たに配備した机上に電源コンセントと情報コンセント(78口)が設置された。これにより、図書館からインターネット等の利用が可能となる。(2002年4月より稼働予定)また、LAN敷設に伴い、館内の各室の名称を一部分変更した。

(1) 旧談話室をパソコンルーム1に名称変更

(2) 旧教職員閲覧室をパソコンルーム2に名称変更

(3) 旧会議室を教職員閲覧室・会議室に名称変更

3. CD-ROM専用パソコンのリプレース(2台)、マルチメディア対応パソコンの新設(2台)を行った。これにより、中央図書館サーバーに接続したCD-ROMの利用、電子図書館内の外部データベース、電子ジャーナルの利用が可能となり、利用者の電子メディア利用の拡充が図られるようになった。また、OPAC端末3台を増設した。

4. 和泉校舎研究棟の合同研究室及び資料室に配架されていた図書館所蔵資料のうち、利用の減少した資料について、教員との了解のもとに、和泉図書館書庫への配置替えを行った。(約2000冊)

5. 第4回図書館講演会「著者と語る」を6月22日(金)に開催した。今回は、本学名誉教授大塚初重氏を講師にお迎えし、「わが古墳研究五十年」の演題のもとに講演が行われた。

6. 2001年4月1日より図書館事務部和泉図書館事務室から図書館事務部和泉図書課へ名称が変更した。

生田図書課

2001年度は利用者へのサービス向上を主要命題に、「利用し易い図書館」の構築を目標とする改善を行ってきた。

図書館業務の基本は利用者への奉仕であり、業務改善を理由に利用者をないがしろにすることは許されない。したがって、業務改善は常に日常業務との「二人三脚」を余儀なくされるが、課員一同の努力によって、2001年度の目標をほぼ達成することができた。以下がその主要項目である(日常業務の範疇は割愛)。

1. 館内の照明改善

夏期休暇中に改善工事が行われた。図書館では、工事中の利用者への影響に心を砕

いたが、1日たりとも休館日を設けることなく、また、利用者からの苦情も1件もないまま工事を完了することができた。図書館の永年の懸案事項であっただけに、ご尽力いただいた関係者各位に心からお礼申し上げる次第である。もちろん、利用者からは好評である。

2. 休日開館

生田校舎では、実験・実習等のため休日でも出校する教員や学生諸君を見受けることがある。その結果、当然のこととして、生田図書館での休日開館を望む声があった。生田図書課では、この要望に応えるべく、2年(回)にわたる職場研修での検討を行い、2002年度からの実施を提案することになった。その後、各機関での承認も経て、いよいよ4月14日からスタートする予定である。ちなみに、2002年度は62日の休日開館を予定しており、2001年度比で58日の増加となる。

開館業務は業務委託で行われるため、サービス内容に制限はあるものの、「休日も開館」という大学図書館の使命の実現として、大きなサービス向上ではないかと考えている。多数の学生・教職員の利用を期待してやまない。

3. 書庫整備

休日開館とともに生田図書館の大きな課題であったが、中央・和泉図書館からの応援をいただき、数万冊の図書・資料の移動と図書のサイズにあった書架の設定等の作業を終えた。この結果、4月1日からB2書庫への入庫が可能となり、「書庫本の全面開架」に向けた第一歩を踏み出すことになった。

抜本的な整備にはクリアしなければならない課題を多く残しているが、現在、その実行計画を作成中である。

4. マルチメディアコーナーの開設

「生田図書館にもマルチメディアコーナーを」の要望に応え、僅か8台のパソコンに過ぎないが、2002年度から開設すべく施設の設置工事を完了した。現在、利用マニュアルの作成段階であるが、新年度の遅くない時期の開設に向けた準備を進めている。中央図書館のような「マルチメディア担当」を配置する人的余裕がないため、急遽、大学が設置した「情報コンセント(33口)」も併せた、コーナーの運営と利用者対応が、開設後の大きな課題である。図書館全体の支援体制をお願いしたい。

この他の事項については報告する紙幅がなくなった。項目のみ列挙すれば以下のとおりである。

(1)和雑誌納入業者の変更 (2)シラバス・文庫本コーナーの整備 (3)情報コンセントの設置 (4)ニューメディア室の閲覧室化 (5)コピー業者変更と担当者の常駐(02年度から)等。